

小児、20〜30代の2.7倍

新型インフル感染リスク

豚由来の新型インフルエンザウイルスに対する感染のしやすさは年齢によって異なり、小児の感染リスクは20〜30歳代に比べて2・7倍前後になるとの分析結果をオランダなどの国際研究チームがまとめた。逆に高齢者は感染しにくく、60歳以上の感染リスクは20〜30歳代の5分の1以下だった。

国際チームまとめ 60歳以上は低く

オランダ・ユトレヒトと米アリゾナ州立大学などの共同チームの成果。英国発行の国際学術誌2

誌に論文を発表した。2009年5月29日〜7月14日の日本国内の流行状況をもとに、数理モデルを利用して分析。感染者に接したときの感染のしやすさを年齢別に調べた。20〜39歳を基準（1倍）とすると、小児は0〜5歳で2・77倍、6〜12歳が2・67倍、13〜19歳では2・76倍だった。40〜59歳だと0・56倍、60歳以上では0・17倍に落ちていたという。

豚由来の新型インフルは「H1N1型」というグループに属するが、このタイプのウイルスは過去にも季節性インフルとして流行していたことがある。過去の季節性インフルへの感染経験が、年齢による新型インフルへの感染リスクの違いとして表れている可能性があるという。

また研究チームは今回のデータをもとに、1人の感染者から何人に感染が広がるかを示す「基本再生産数」も分析。1・21〜1・35と推定され、季節性と同程度か、やや低い可能性もある。同チームは昨年6月、

関西の初期の流行データをもとに基本再生産数を2・3と算出していた。ただ、この数字は高校生を主な対象としており、数値がやや高く見積もられていたと考えられるという。